十月十四日　日ソ沿岸市長会議から帰る。わずか十一日間であったが、政治経済体制の全く異る国を見て、得るところが大きかった。市民のみなさんに報告しなければならないのだが、団体等の求めに応じてお話ししたい。

十月十八日　県道豊栄天王線の改良につき、県河川課長、新潟土木事務所長と協議。銅屋川を逃み、潟口橋を左折する現在線は拡幅が困難なので、両村囲排水機場の手前から斜めゆるかに左折して前新田沖部落前の堤防に出ることとする。ここで福島潟放水路に百メートル余りの橋をかける大工事があるが、工事は急ぐ。

十月二十日　建設省河川局の近藤専門官が胡桃山排水機場工事の視察に来たので、福島潟放水路の計画現場をまわってもらい、明年度用地買収費予算十億円以上を認めていただきたい、と陳情。

十月二十五日　「大正五年に夏目漱石が死んだ。この年には日露戦争の大山総司令官が死んだが、国民は夏目漱石の死を惜しんだ」

葛塚農商学校で国語の教師だった片桐義一先生は、教科書で教えるのは時間の半分で、あとは作者の人がらやその作品の解説だった。吾輩は猫である、の一節が教科書にあるのだが、先生は坊ちゃん、三四郎、野分、というように話が尽きない。私たちは後で、自らの漱石の作品を全部読んだ。教育の効果とはこういうものだろう。先生は終戦の年、停年を待たずに蓮野小学校長を退職した。

戦争協力を教えた教師が、敗戦後別なことは言えない、というのだ。その片桐義一先生が、九十歳で笹神村上高関の本宅で死亡された。昨年亡くなられた山田久一先生とともに、農商学校創設当時の功労者である。ご冥福を祈る。

十月二十八日　岡方地区戦没者慰霊祭に参列し、日ソ沿岸市長会議の折、ハバロフスクとイルクーツクの日本人墓地を参拝したことを報告。墓地はよく整備され、墓の番号順に名簿ができており、遺族は埋葬されている場所をさがして参拝できる。豊栄市でシベリヤ抑留中の死亡者は十七名。

市長の日誌　石井耕一

ウランウデ市役所広場のレーニン像の前で。

▼イルクーツク日本人墓地で

やあ!!　おげんきですか

馬術で国体出場十数回　中村喜尚さん(37)

毎朝、新潟まで乗馬の練習に通う中村喜尚さん

馬に〝取りつかれた〟動機を一つ

「私は、佐渡の両津生まれです。生家は、山奥に近い部落で、主に山林を伐採して生活しています。木を伐り出すころになると、業者が馬を引すれば、マイナスがつき、マイナスが多ければ多いほど成績が悪いということです。満点であれば0点ということですね」

国体出場は、四十一年から

と聞きますが

「はい、四十一年からで、今回の宮崎まで、一回休んだだけです。成績は聞かないでください。最初のころは、結構良かったのですが、ここ数年は、ダメです」

早朝から馬さんと?

「はい、よほどのことがない限り、毎朝五時起床です。すぐ、鳥屋野にある新潟乗馬クラブへ行き、愛馬アイドル号の手入れをし、約一時間半乗馬します。七時半に家に帰り、朝食をとった後、八時には学校へ行きます。

馬というものは敏感でして、常に側で見てないといけないんです。だから、国体の時など、人馬一体なんです。私は、馬匹輸送車の運転をする時もあります。馬術以外の選手は、試合後、市内観光など言っていますが、我々は、馬と一緒にトンボ帰りです」

子供にも教えているとか

「休日などは、新潟市のスポーツ少年団に乗馬指導をしています。豊栄市には、立派な競馬場もあるのだし、どんどん若い人たちが、やればいいのですが……。小学校高学年や中学生など、まわりが環境を作ってやれば、やる人もいるんでしょうけれどね。豊栄高校など、どうでしょうか」

中村さんは、県立新発田農高の教諭。とにかく忙しい人で、この日も、夕方、ようやく取材できました。相撲と酒が大好き。

東栄町三丁目

出土品は語る (19)

鳥屋遺跡

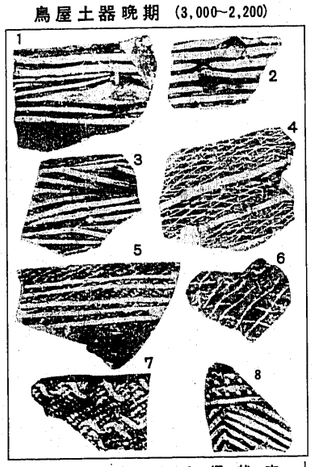
約一万二千年前の草創期から始まった縄文時代もいよいよ最後の晩期縄文時代となります。晩期縄文時代は約三千年前から二千二百年前までといわれ、その後に稲作を中心とした農耕と鉄使用の弥生時代がやってくるのです。この晩期縄文の遺跡は第二砂丘の聖籠町二本松、新発田市佐々木地内の馬見坂、第三砂丘の城山、第四砂丘の鳥屋に発見されています。

古代の人は、交通の便のよい、よく陽のあたる、豊かな食生活のできる水辺に住みますから二本松と馬見坂の人達は紫雲寺潟と福島潟に面したところに、城山と鳥屋の人達は福島潟と島見前潟の連絡水路に突出した砂丘の先端に住居したのでしょう。

後期縄文は土器全体に縄文をつけ後へらなどで縄文をきれいにすり消す新しい手法が流行しましたが、晩期縄文になると工字文が流行してくるのです。工字文というのは平行線の二線を孤線によって結び工の字のようになった文様をいうのです。これは青森県西津軽郡亀ケ岡を中心として元和九年（一六二三）頃から有名になった亀ケ岡式土器といって東北地方の晩期縄文式土器の総称となっています。ところが大正十四年長谷川人、山内清男の両氏が岩手県の大洞（ぼら）の四つの晩期の貝塚を調査し大洞式土器と名づけ六つの型式にわけました。それから亀ケ岡式土器を大洞式土器とも呼ぶようになりました。鳥屋遺跡の土器は工字文が一番多く其他網をおしたような網状文、人という字のような形を連ねたあやすぎ文、へらで数條の平行線を引いた平行沈線文、全体に亘ってつけられた条痕文など文様は多彩です。鳥屋の工字文は一番新しい大洞A かA′で晩期縄文後半のもので東北文化の影響を強く受けています。

―畠山佑二記―

鳥屋土器晩期　(3,000~2,200)



1、2　工字文
3、　あやずぎ文
4、6　網状文
5、　平行沈線文
7、　あやくり文

はし

(8)　十二橋

だんじゃないでしょうか。今の橋には、ちゃんと、昭和三十四年二月竣工、十二橋と刻んであります」

「今ごろの季節になりますと、米の収穫期でしてね、米俵をいっぱい積んだ、牛車や馬車が通るんですが、そのころの道路は、道幅が狭くて、バスが来ると、すれ違いができないんです。当時、自動車といえば、バスぐらいなもんでしたから、みんな珍しがって、外へ出たもんです。そうすると、牛車や馬車がバックするのでなく、バスが広い所まで何百メートルも下がるんです。牛車や馬車の方が優先でしたのでしょうかねぇ」

この用水は、欠かすことができないのでしょうね

「それはもち論です。農家の人は、農業用水でしょうし我々も、洗いものをするのに必要です。昔はね、二百十日まで、満々としていたもんです。きれいな阿賀の水なもんだから、風呂の水とか、うわ水は、飲料水にもしました。リヤカーを引っぱって、水を運んだものです」

「木橋は、低い橋だったもんで、鋪装時には、道幅を広くし、この橋も広くなりました。しかし、現在、やはり道路は狭いですね。競馬開催日になると福島ナンバーの車が列をつくるんですよ。バスが午前一回、午後一回なんかいう時代もあったんですからねぇ」

写真は当時を語る横山さんと十二橋（以前には、寺との関係か三昧橋ともいわれていました）